

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2011～2013

課題番号：23243080

研究課題名(和文)社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーションの理論的・実践的研究

研究課題名(英文)Curriculum Innovation for the Student Ability which has Social Relevance

研究代表者

小玉 重夫(Kodama, Shigeo)

東京大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：40296760

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 31,500,000円、(間接経費) 9,450,000円

研究成果の概要(和文)：従来のカリキュラムは、大学における学問体系を高校・中学・小学校へとおろしていくように構成されていた。こうしたカリキュラムは、市民社会生活との関連(社会的レリバンス)を欠くという問題点をはらんでいた。そこで本研究では、戦後型社会の構造転換を踏まえた公教育の新しい方向性を探り、理論面と実践面から検討を加え、次の学習指導要を視野に入れたカリキュラム・イノベーションの可能性と条件を探った。こうした目的を達成するために、「基幹学習ユニット」「生き方の学習ユニット」「社会参加の学習ユニット」の3つのユニットを設け、さらに、東京大学教育学部附属中等教育学校との連携を可能にするために「総括ユニット」を設けた。

研究成果の概要(英文)：The social structure of school curriculum in Japan since 1958 has been highly regulated by the national government. The contents of the school curriculum have been discipline based and controlled by the academism and higher education. So in this structure school curriculum has been designed for educating the professional academician and doesn't have social relevance.

In our research project we are inquiring the way to change this social structure of curriculum by curriculum innovation. Our vision of the innovated new curriculum is a kind of curriculum which has social relevance between school and society. In this new innovated structure school curriculum is designed for educating the mature and active citizen. The organization of our project consists of 4 units. In each units there are 4 or 5 researchers belonging to our research project.

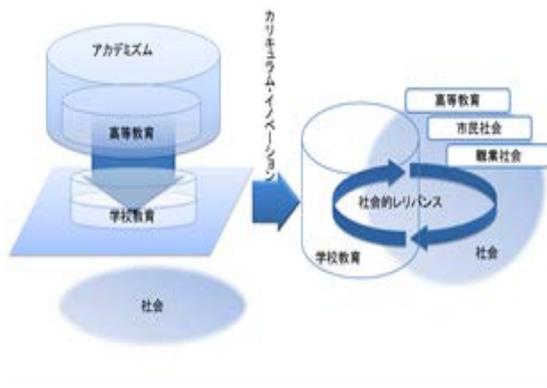
研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：カリキュラム論 学力論 イノベーション レリバンス 市民性 公共性 シティズンシップ

1. 研究開始当初の背景

従来の教科カリキュラムは、大きく見れば大学（アカデミズム）における学問体系を高校・中学・小学校へとおろしていくように構成されていた。こうしたカリキュラムは、職業や政治経済を中心とする市民社会生活との関連（社会的レリバンズ）を欠くという問題点もはらんでいる。「ゆとりか詰め込みか」といった二者択一的な指導観から脱却を図り、社会的レリバンズを有する学力観へと転換を図る必要がある（下図）。

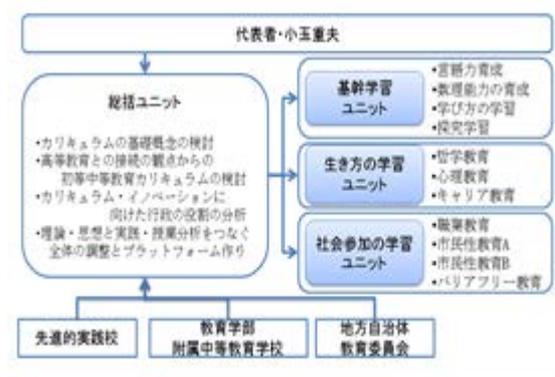


2. 研究の目的

本研究では、以上の背景を踏まえて、戦後型社会の構造転換を踏まえた公教育の新しい方向性を探り、理論面と実践面から検討を加えることをめざした。そして最終的な目的を、次の学習指導要領およびその後を視野に入れたカリキュラム・イノベーション（革新）の可能性と条件を探ることにおいた。

3. 研究の方法

こうした目的を達成するために、次の図に示すような「基幹学習ユニット」「生き方の学習ユニット」「社会参加の学習ユニット」の3つのユニットを設け、理論的な検討を進めた。さらに、東京大学教育学部附属中等教育学校との連携を中軸にすえ、研究代表者及び研究分担者が関与している他の学校や自治体との連携も含めた共同研究を組織し、学校づくりや教育行政の改革も視野にいて具体的な実践の在り方を探求した。これらを可能にするための組織として、上記の3つのユニットに加えて総括ユニットを設け、附属学校等の実践現場とを架橋するプラットフォームの役割を持たせた。



（本頁に示した二つの図の作成にあたっては、河野麻沙美氏の協力を得た）。

4. 研究成果

以下では、各ユニットにおいて開発、提案されたカリキュラム案について概観する。詳しくは、後掲の学校教育高度化センター『2013年度年報』所収の植阪友理・大桃敏行・小玉重夫「学校教育行動化センター関連事業（イノベーション科研）：総括ユニットにおける3年間の活動の記録」を参照されたい。以下は、その抜粋である。

基幹学習ユニット 基幹学習にかかわるカリキュラム案の1つ目は、数理能力の育成にかかわるカリキュラム案である。この提案の中心は、「日常的事象と関連付けられた数学的内容を学ぶ（日常の中の数学を学ぶ機会を設ける）。また、数学と理科等を相互に関連づけあう、いわゆるクロスカリキュラム的な授業も、各教科の中に設定していく。」ということである。具体的な単元構成の方法に関する提案も含まれている。具体的には、手続き的な学習に加えて、①単元の導入に日常の中の数学に単元内で獲得した知識を活用し、概念的理解を深める課題を新たに設ける、②単元の終末に日常の中の数学に単元内で獲得した知識を活用し、概念的理解を深める課題を新たに設けるなどである。例えば三角比の導入の際に、「斜面の角度を測れない場合に、どのように求めるか？」のように既に学習している考え方（ここでは相似）でも解決は可能であるが、新たに学ぶ内容の理解（ここでは三角比）にもつながる課題を実施する、非線形関係の学習の終末に「1リットルの牛乳パックの各辺の長さを求める」などように

非線形関数を活用する課題を行うなどである。こうした活動を通じて、手続き的知識の獲得のみならず、深い理解を伴った教科学習の理解が促進され、数理能力の育成につながると考えられる。

2つ目は、メタ文法の育成にかかわるカリキュラム案である。ここでは、中学校3年生から高校2年生にかけて、メタ文法概念を自覚化させ理解を促進するような授業を、言語学習におけるアンカーカリキュラムとして設定することが提案されている。メタ文法能力とは、「言語に関して『文法』を意識化し、文法構造について自分で考えたり説明できる能力」のことである。また、アンカーカリキュラムとは、言語間を架橋する学習のあり方を方向づける錨（いかり）のような役割を果たす授業を意味する。ここでは例えば、「黒い目のきれいな女の子に会った」といった内容を、日本語と英語で明示的に対比させ、そのことを通じてルールを発見・意識化させるといった指導や英語と漢文、現代日本語文法と古典文法の対比などを訳出を通してとらえ、修飾関係、語順、時制等に関わる文法概念の理解を深めることが提案されている。こうした活動を、従来の授業に加えて定期的に行うことで、これまでに学習した内容をより深めるとともに、将来の言語学習をより深めるための機会として機能することが期待されている。

3つ目は、探究型学習にかかわるカリキュラム案である。ここでは、中等教育段階の最後に、研究もしくは論文として、自分の考えをまとめて発信するということが提案されている。中等教育の最後に行う卒業研究などが、この代表的な例である。ここでいう「論文」とは必ずしもこれまでに明らかになっていることを踏まえたうえで、オリジナリティを加えることを意味しないが、少なくとも自分の考えをまとめて外に発信するという活動を伴うことが期待されている。さらに、こ

うした活動を実現するために、「総合的な学習の時間などを活用して、図書館の使い方など自分の関心に沿って調べ学習を行うための技法を知る」、「論理的な文章を書くための方法を学び実際に書いてみる」、「探究の成果を口頭発表しそれを元に議論する」といった活動を設けることになる。なお、探究学習の機会は、総合的な学習の時間に限らず、通常の教科教育にも存在する。こうした教科教育の探究学習の機会に、これらの過程で学んだ知識・技能を活用したり、逆に教科教育の探究学習の機会に卒業研究等で利用するような知識・技能を身につけたりするといった、双方向的な学習プロセスも期待される。

4つ目は、メタ学習の促進にかかわるカリキュラムである。メタ学習とは、学習の方法やしくみそのものについて学ぶことを意味している。そうした学習を通じて、効果的な学習方法（学習方略）や、学習に対する考え方（学習観）を身につけた学習者を育成することが目指されている。中等教育の初期には、記憶や理解といった学習の仕組みについて学習し、中等教育の中期以降では、自分の学習過程や認知プロセスを振り返るといった内省を要するような学習も取り入れていくことが提案されている。まずは総合的な学習の時間を中心に実施し、心理学の実験などの体験も交えながら学習を進めることが想定されている。これらに加えて、各教科の学習とも連携し、教科学習の中でなかでどのように具体的に生かしていくのかについてもあわせて学習するように考えられている。

社会参加の学習ユニット 社会参加の学習ユニットにかかわる提案の1つ目は、市民性教育に関するカリキュラムの提案である。このカリキュラムにおける提案の中心は、中等教育全般にわたって、論争的問題を議論する時間を、授業の中に設けていくということである。論争的問題とは、八ッ場ダム建設の是非、いじめ問題にどのように対処するのかな

ど、社会においてもいくつかの立場が存在し、必ずしも明確な答えの出ていない問題のことである。こうした問題を授業で扱うことを継続することで、社会における争点を知り、市民として自らの何らかの行動に結びつけていくための素養を身につけることが期待されている。なお、発達段階に応じた指導上の工夫として、学年が進むにつれて「思考(当該問題に関する多面的な知識)」「判断(それぞれの立場に対する価値判断)」「意志(判断に基づく自らの行動)」の3側面をより深く掘り下げていくことが想定されている。総合的な学習においてこうした授業を実施するのみならず、道徳や社会といった各教科での授業実践と連携することも意図されている。

社会参加の学習ユニットからの2つ目の提案は、バリアフリー教育に関するカリキュラムの提案である。中等教育において学ぶべきこととして、自らの他者認識のあり方を自覚することや、社会に存在する目に見えない非対称性に気づくということなどが挙げられている。具体的な教育プログラムも開発されており、例えば「ザ・ジャッジ! 迷惑なのは誰?」では、はじめに電車の中でのある一場面をストーリーとして聞かせ、子ども達に判断を求める。その後、「実は腰痛であった」などといった条件を次第に明らかにし、その都度判断を求める。こうしたことを通じて、自らの持つステレオタイプを理解するとともに、他者に対する想像力、多様な生に対する受容的態度などを養うことが目指されている。プログラム自体は総合的な学習の時間を意識して開発されているが、教科の中で関連する単元との連携も想定されている。

社会参加の学習ユニットにおける3つ目の提案は、職業的レリバンスのある教育に関するカリキュラム案である。このカリキュラムには、各分野の職業のリアルを知ることが目的である「適応」と、職業生活や社会の問題を是正していく方法を知ることが目的の

「抵抗」という2つの要素が含まれている。「適応」に関しては、「ものを作る仕事を知る」、「国際的な仕事を知る」、「人をケアする仕事を知る」といった具合に、仕事をいくつかの領域に分け、それぞれ学校外からエキスパートを招いて仕事の実情を紹介してもらうことが意図されている。一方、「抵抗」に関しては、働く者を守るものとしての労働法を知る、市民運動について知るなどが含まれる。「適応」が職業生活の主にポジティブな側面を生徒に伝えるのに対して、「抵抗」にはネガティブな側面の知識も含まれている。このため、学年配置としては「適応」を先に学び、理解が深まってきた段階から、「抵抗」の学習を始めることが想定されている。

生き方の学習ユニット 生き方の学習ユニットにかかわる1つ目は、ライフキャリア教育に関するカリキュラム案である。職業的レリバンスのある教育において論じられていたように、職業生活には思い通りにならないことも多く、夢や希望だけでは済まない厳しさがある。このような働くことのネガティブな側面に対して、社会への働きかけ方を学ぶのみならず、いかにして自分の心と折り合いをつけながら職業生活を含めたライフキャリアを生き抜いていくのかについて、自分の内面への働きかけ方を学ぶことも重要な課題である。以上を踏まえ、人生における長期的展望と多軸性を理解し、レジリエンスを向上させることが提案されている。具体的な時期については、働くことと生きることについて理解と考えがある程度深まった後に、働くことと生きることの厳しさについて学習しはじめるという段階的導入が有効と考えられる。

2つ目は、心理教育に関するカリキュラム案である。従来の心理教育の中心は、現実の人間とどうつきあっていくのかのスキルを指導するものが中心であった。これに加え、「うつ予防」などといった教育も加え、自分の心の健康をどのように維持するのかといった点についても、中等教育段階から指導していくことが提案されている。また、対人スキルについても、現実の人間に対するつきあい方のみならず、バーチャルな世界(ネット)とどうつきかうかについても取り上げられている。さらに、自分も他者も尊重しつつ、自分の思いをどう社会に発信していくかを知るために、アサーショントレーニングなどもとり入れることも企図されている。これら

は保健体育の授業の他に、道徳などの授業でも行うことができると考えられている。

3つ目は、哲学教育に関するカリキュラム案である。この提案の中心は、子ども自身が何らかの<生きる>に関する洞察を行う「哲学の授業」を学校教育の中に取り入れていくことにある。一般に「哲学」と呼ばれている知識を子どもに伝える活動ではなく、存在論的な意味で思考することを支援する授業である。存在論的思考については、様々な議論が行われているが、ここでは「私たちが一命を享受しているからこそ、さらにこの世界を享受しているからこそ、様々な活動を行うことが可能になっていることに気づくこと」が想定されている。こうした気づきを得ることで、命への畏敬の念や感謝を生み出し、人の恣意や欲望を抑え、人の倫理的な基盤となっていくと考えられる。方法としては、探究学習として行うことが提案されている。発達段階に応じて異なる内容を取り上げることが想定されており、例えば、アマモの再生を通じて地場産業の再生につながった事例などを取り上げる「里海プロジェクト」などが含まれている。

付記：ここまで述べてきたことは、後掲の学校教育高度化センター『2013年度年報』に掲載された本科研のまとめを適宜抜粋したものである。詳細はそちらを参照されたい。

5. 主な発表論文等

(スペースの関係から、研究代表者による主要業績のみを掲載する)

〔雑誌論文〕(計6件)

小玉重夫「シティズンシップ教育の可能性」『月刊 高校教育』第47巻第2号、学事出版、2014年2月、pp.34-37

小玉重夫「「国家と教育」における「政治的なるもの」の位置価—教育に政治を再導入するために—」教育哲学会『教育哲学研究』第107号、2013年5月、pp.42-48

小玉重夫「ハンナ・アレントとベーシックインカム—脱冷戦的思考の方へ—」『理想』No.690、2013年3月5日、理想社、pp.50-61

小玉重夫「マルクスを教育研究に再導入する」『近代教育フォーラム』21号、2012年10月、教育思想史学会、pp.15-22

小玉重夫「市民科学と放射線教育」『科学』82巻10号、2012年10月、岩波書店、pp.1142-1145

小玉重夫「教育政治学の方へ—アルチュセール以後のイデオロギー論に着目して—」『日本教育政策学会年報』第18号、2011.7.pp.8-17

〔学会発表〕(計3件)

小玉重夫「教育・身体・ポリティクス」招待講演、日本スポーツとジェンダー学会第

12回大会、2013年7月14日、京都教育大学

Kodama, Shigeo "Citizenship Education in Japan: Focusing on the Context of Multipolar World in the Post-Cold War Era", 9th CitizED International Conference in Tokyo, Japan 2013 Symposium: Comparative Approach on Citizenship Education: East and West, 2013.7.15.

Kodama, Shigeo "Citizenship Education and Politics in Japan: Focusing on the context of globalization and postindustrial society", The 10th Annual Hawaii International Conference on Education, January 5-8, 2012, Honolulu, Hawaii

〔図書〕(計2件)

小玉重夫『難民と市民の間で—ハンナ・アレント『人間の条件』を読み直す』現代書館、2013年10月、215頁

小玉重夫『学力幻想』筑摩書房、2013年5月、223頁

〔その他〕

ホームページ

小玉重夫の研究室

<http://homepage2.nifty.com/eduscikodama/>

『2013年度年報』東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化センター、2014

<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/bulletin/#70-0>

『2011~2013年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究A)「社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーションの理論的・実践的研究」(課題番号:23243080)シティズンシップ教育グループ研究成果報告書』

研究代表者:小玉重夫

http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/handle/2261/55353/simple-search?query=%E3%82%B7%E3%83%86%E3%82%A3%E3%82%BA%E3%83%B3%E3%82%B7%E3%83%83%E3%83%97%E6%95%99%E8%82%B2%E3%81%AE%E3%82%AB%E3%83%AA%E3%82%AD%E3%83%A5%E3%83%A9%E3%83%A0%E9%96%8B%E7%99%BA&rpp=15&sort_by=3&order=ASC&etal=0&submit_search=%E5%A4%8

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小玉 重夫 (Kodama, Shigeo)
東京大学・教育学研究科 (研究院) ・教授
研究者番号 : 40296760

(2) 研究分担者

秋田 喜代美 (Akita, Kiyomi)
東京大学・教育学研究科 (研究院) ・教授
研究者番号 : 00242107

河野 麻沙美 (Kawano, Masami)
上越教育大学・学校教育研究科 (研究院) ・
講師
研究者番号 : 00539520

大桃 敏行 (Omomo, Toshiyuki)
東京大学・教育学研究科 (研究院) ・教授
研究者番号 : 10201386

高橋 美保 (Takahashi, Miho)
東京大学・教育学研究科 (研究院) ・准教授
研究者番号 : 10549281

牧野 篤 (Makino, Atsushi)
東京大学・教育学研究科 (研究院) ・教授
研究者番号 : 20252207

藤村 宣之 (Nobuyuki, Fujimura)
東京大学・教育学研究科 (研究院) ・教授
研究者番号 : 20270861

本田 由紀 (Honda, Yuki)
東京大学・教育学研究科 (研究院) ・教授
研究者番号 : 30334262

川本 隆史 (Kawamoto, Takashi)
東京大学・教育学研究科 (研究院) ・教授
研究者番号 : 40137758

星加 良司 (Hoshika, Ryoji)
東京大学・教育学研究科 (研究院) ・講師

研究者番号 : 40418645

南風原 朝和 (Haebara, Tomokazu)
東京大学・教育学研究科 (研究院) ・教授
研究者番号 : 50156246

両角 亜希子 (Morozumi, Akiko)
東京大学・教育学研究科 (研究院) ・准教
授
研究者番号 : 50376589

下山 晴彦 (Shimoyama, Haruhiko)
東京大学・教育学研究科 (研究院) ・教授
研究者番号 : 60167450

植阪 友理 (Uesaka, Yuri)
東京大学・教育学研究科 (研究院) ・助教
研究者番号 : 60610219

市川 伸一 (Ichikawa, Shinichi)
東京大学・教育学研究科 (研究院) ・教授
研究者番号 : 70134335

白石 さや (Shiraishi, Saya)
岡崎女子短期大学・教授
研究者番号 : 70288679

田中 智志 (Tanaka, Satoshi)
東京大学・教育学研究科 (研究院) ・教授
研究者番号 : 80265967

根本 彰 (Nemoto, Akira)
東京大学・教育学研究科 (研究院) ・教授
研究者番号 : 90172759

金森 修 (Kanamori, Osamu)
東京大学・教育学研究科 (研究院) ・教授
研究者番号 : 90192541